

## Lenin Revisited ; Or Untimely Lenin?

<i>Yutaka Nagahara</i>	[Editor's Preface]	6
 [Proposition]		
<i>Slavoj Žižek</i>	Can Lenin Tell Us About Freedom Today?	12
<i>Yutaka Nagahara</i>	Essai: Die Wahrheit liegt <i>nicht</i> in den „Systemen“	28
 [Interview]		
<i>Shin'ichi Nakazawa</i>	The Style for (Re-)Reading-back of Lenin	36
 [Actualities]		
<i>Alex Callinicos</i>	Leninism in the 21st Century?	66
<i>Daniel Bensaid</i>	Les sauts! Les sauts! Les sauts!	88
<i>Étienne Baibar</i>	Lénine et Gandhi: une rencontre manquée	100
<i>Hanako Koyama</i>	Essai: Arendt and Lenin: On the Beginning Ex Nihilo	112
 [Studies on Lenin]		
<del><i>Kevin B. Anderson</i></del>	<del>The Rediscovery and Persistence of the Dialectic</del>	<del>118</del>
<i>Lars T. Lih</i>	Lenin and the Great Awakening	134
<i>Satoshi Shirai</i>	The Drive of Revolution, The Revolution of Drive	148
<i>Alan Shandro</i>	Lenin and Hegemony	174
<i>Masaki Sakiyama</i>	Latin America and Lenin	194
 [Theoretical Perspectives]		
<i>Alain Badiou</i>	Un se divise en deux	222
<i>Jun'ichiro Matsumoto</i>	Translator's note : the Century of Lenin	231
<i>Frederick Jameson</i>	Lenin and Revisionism	232
<i>Sylvain Lazarus</i>	Lénine et la Form de Parti	244
<i>Jean-Jacques Lecercle</i>	Lenin, the just	256
<i>Shin'ichiro Tanaka</i>	Essai: What is Revolution !	270
 [Contemporary Struggles]		
<i>Georges Labica</i>	De l'impérialisme à la mondialisation	282
<i>Domenico Losurdo</i>	Lenin and the <i>Herrenvolk</i> democracy	298
<i>Yoshiyuki Koizumi</i>	Appeal to (for) the feable	310
<i>Slavoj Žižek</i>	Leninism Today: The Perspectives	328
<i>Satoshi Shirai</i>	[Editor's Postface]	340
[Contributors]		346

表紙デザイン：愛甲美智  
本文レイアウト：佐藤道健

編集企画

長原 豊  
白井 聡

## レーニン 〈再見〉

あるいは反時代的レーニン

レーニンの再見 長原豊 著、白井聡 編、1991年

意欲と謝辞

長原 豊

6

提起

いまレーニンは自由について語る事ができるか？……スラヴォイ・ジジエク  
真理は「体系」のうちにはない……長原 豊

28 12

インタヴュー

レーニンを読み返す文体……中沢 新一氏に聞く「聞き手 白井聡」

36

アクチュアリティー

二十世紀のレーニン主義……

アレックス・カリニコス

66

飛躍ー 飛躍ー 飛躍ー……

ダニエル・ベンサイド

88

レーニンとガンジー……

エチエンヌ・バリパール

100

レーニン

アーレントとレーニン……

小山 花子

112

本書で使用した図版類は、目次頁のものを除いて、『レーニンの生涯』1980年、  
 社会主義協会出版局、及び『レーニン生誕100年記念レーニン写真集』1970  
 年、(株)新時代社を使わせていただきました。

レーニン研究

弁証法の再発見と持続……………ケヴィン・アンダーソン  
 レーニンと大いなる覚醒……………ラース・リー  
 革命の欲動、欲動の革命……………白井 聡  
 レーニンとヘゲモニー……………アラン・シャンドロ  
 ラテンアメリカへとレーニン……………崎山 政毅

理論的展望

へんはみずからへんに割れる……………アラン・バディウ  
 訳者解題 レーニンの世紀……………松本 潤一郎  
 レーニンと修正主義……………フレデリック・ジェイムソン  
 レーニンと党の形態……………シルヴァン・ラザルス  
 正しくも的確な者、レーニン……………ジャン||ジャック・ルセルクル  
 革命とは何か……………田中 伸一郎

現代における闘争

帝国主義からグローバリゼーションへ……………ジョルジ・ラビカ  
 レーニンと支配民族民主主義……………ドメニコ・ロストド  
 無力な者に(代わって)訴える……………小泉 義之  
 現代のレーニン主義……………スラヴォイ・ジジエク  
 後記 われわれの(善悪の彼岸)……………白井 聡

◆ 執筆者・訳者一覧

346 340 328 310 298 282 270 256 244 232 231 222 194 174 148 134 118

表紙：1920年5月5日、モスクワのスペルドルフ広場で前線に向かう赤軍兵士を前に演説するレーニン。  
 背後の文字は「哲学ノート」自筆原稿。

表4：100の言語に翻訳されたレーニンの著書群。色は本特集用に自由に着色したもの。

# 弁証法の再発見と持続

ケヴィン・B・アンダーソン Kevin B. ANDERSON ◆ 訳 浜野 喬士 (HAMANO Takashi)

現代にあつてレーニンの名を何らかの肯定的な意味において喚び起こすことは、耳障りとは言わないまでも、左翼においてすらナイーブなものとして聞かせるのが普通である。レーニンは、スターリンの残忍な全体主義的体制の下地を作つたのであり、その行動のみならず政治上のもろもろの思想は、それ自体が、権威主義的で粗野であり、暴力的なものですらあつた。一九八〇年以降、こうしたことが繰り返言われてきた。マルクスへと還ろうとするのであれば、レーニンとボルシェビズムにたいして防疫線防疫線、*don sanitaire* を引く必要がある、これも再三なされた提案である。レーニンの名は、たとえそれが喚び出されるとしても、「ユートピア的」思考に巻き込まれることで、いかに厄災が招かれるか、ということの一つの事例として、幾度も言及されたのである。

こうした見解の提唱者たちが、傲慢であることはもちろん、ナイーブで自己矛盾に充ちた考え方に陥るといふ間違いを犯していることを論じさせていたきたい。第一に彼らは、ロシア革命初期におけるいくつかの注目すべき肯定的な成果というものを見落としてゐる。第二に彼らは、政治思想にたいしてレーニンが与えた多大な独自の貢献に着眼しない。第三に彼らは、レーニンを高

重視されかつ参照されてもいる多くの重要な思想家たちを忘れてもいる。だが、以上のことを銘記することで、レーニンの生涯と作品の少なからぬ側面にたいする必要な批判を回避しようというのではない。むしろこうした種類の問題を頭に入れておくことは、レーニンとその遺産にたいして（戯画化ではなく）真剣な批判がなされうるための前提条件なのである。

本稿はレーニンの理論的成果に力点を置く。そうである以上、まず私は、自分自身も彼の思索のうちに重大な弱点を見てとつてゐることについて述べておきたいと思う。第一に領導する前衛党なるものの擁護、こうした考え方はマルクスのうちには見いだされないわけであるが、それは、革命的組織の貧弱なモデルとして、長きにわたつてわれわれを悩ませてきた。第二に、一九一七年以降のレーニンの多くの行動、なかでも一つの政党しか存在しない国家を設立したことと労働者のソヴィエトを傷つけたことは、革命的民主主義のモデルとはなり得ないものであつた。第三に、レーニンが弁証法的思考について重要な貢献をしたということについては後で論じるにしても、それでもレーニンの弁証法的思考についての著作は、生硬かつ機械論的な「唯物論と経歴批判論」（一九〇八年）に見られるように、均質なもの

ではない。<sup>(4)</sup> 以上のことが銘記されていれば、自分は何らかの意味でレーニン主義者であるなどと自己規定せずとも、この偉大な革命的指導者をもつ魅力的な多くの特徴を評価することは依然として可能であろう。(とはいえ) そうした自己規定は、通常、前衛党に関するレーニンのエリート主義的な概念を固守していると取られるのが支配的な言説状況である。

私はレーニンについてのある著名な思想家の発言を引くことから始めたいと思う。この思想家にたいする一般的イメージは、多くの人が考えるように、その生涯と思想がレーニンやボルシェヴィズムからは遙かに隔たっている。それはヒューマニスト、自由主義的な左翼といったイメージですらある。この人物、フランクフルト学派の高名な心理学者エーリッヒ・フロムを参照しよう。次のような彼の記述を知るとは読者を驚かせるかもしれない。一九五〇年代末、フロムはレーニンを「妥協なき真理の感覚」が備わり、「実在性のまさに本質へと突き進み、また人を欺こうとする表層には決して騙されることなく、また抑えがたい勇氣と高潔さ、人類とその未来への深い関心と献身を持ちながら利己心がなく、権力への虚栄心や渴望といったものはほとんど持ち合わせしていない」人物として描いたのである。フロムはまた、レーニンを復讐心に燃えた殺人鬼スターリンあるいは日和見主義的で保守主義的なスターリンと対置した。さらにフロムは、スターリニズムを革命的マルクス主義と同一視するか、あるいは少なくともその延長線上に置くような一般的な理解の仕方を嘆いたのである。<sup>(5)</sup>

「社会主義ヒューマニズム」、「自由からの逃走」、「愛するといふこと」だけでなく、他にも多くのヒューマニスティックな心理

学に関する著作をものし、また一九六〇年代における平和運動や西欧反政府運動を支援したこの著名な人物の上記のような陳述を前にして、われわれはしばしば再考を促されるはずである。確かにフロムは、一九一八―二一年におけるロシア内戦の破壊性や当該期にレーニンが採った独裁的な手段に気づいてはいた。だがレーニンやロシアについて今日の論者たちが述べるのとは異なり、彼は一九一七年のピジョンの雄大さをもまた見抜いていたのである。フロムや同世代の大多数にとつて、ロシア革命は第一次世界大戦における大虐殺を終わらせるのに役立つ革命であり、労働者階級を支持する政府に権力を与えた革命であり、またユダヤ人や他のマイノリティーをツァーリズム、すなわちヨーロッパにおいてもつとも非寛容的な政治体制から解放した革命であり、同時にローザ・ルクセンブルクのような革命家たちを急進的なドイツ変革の試みへと、つまり一九一九年にナチズムの先駆者たちによつて彼女が惨殺されたときに挫折してしまつた試みへと鼓舞した、そうした革命だったのである。

### Ⅰ レーニン、ヘーゲル、および「西欧的マルクス主義」 密かな関係

フランクフルト学派に属するフロムの仲間たちのうちの誰一人として、つまり通常かなり左派として考えられているヘルベルト・マルクーゼのような人でさえ、フロムがレーニンに示したような感情を決して公言しはしなかった。それどころか、フランクフルト学派の哲学者たちは、たとえレーニンに言及する場合でも、彼を粗野で卑俗なものとして見がちであるか(テオドル・アドル

く、あるいは若干軽蔑の度合いを減らしはするものの、それでもなおスターリンの先駆者として見るといったように、彼をスターリンとの根本的な連続性のうちにみるといった傾向（マルクレーゼ）があつた。マルクレーゼとアドルノは、レーニンが一九二四―一五年に記した「ヘーゲル・ノート」について論じたことはなかつた。両者が、生涯を通じてマルクス主義とヘーゲルの関係について熱心に書き記したという事実を念頭におけば、これは極めて奇異に思われる。とはいへ、彼らがこのように口を噤んでいるとしても、次の事実は揺るがし得ない。すなわち、彼らやいわゆる一九二〇年代の「西欧マルクス主義者」――シエルジ・ルカーチ、アントニオ・グラムシ、カール・コルシユなどが、まさに一九一七年の新しい衝撃を契機としてマルクス主義の弁証法的核心の再発見へと向かつた以上、彼らは重要な諸点においてレーニンとロシア革命に負つているという事実が、それである。

西欧マルクス主義と批判理論が歴史を説明する標準的なやり方によつては、看過ごされるか過小評価されてしまう二つの重要な事実がある。第一に、これは一般的なレヴェルでの話であるが、レーニンがヘーゲルに関するもつとも重要な著作、すなわちいわゆる一九一四―一五年のノートを書いたのは、ルカーチが一九二三年に「歴史と階級意識」を出版するほぼ一〇年前であつた、という事実である。ドイツでは、レーニンのノートは一九三二年になつてようやく出版されたわけだが、その一方で彼のヘーゲルや弁証法に関する一九一四年以後の著作は一九二〇年代初頭にはすでに世に出はじめていた。したがつて、レーニンはルカーチに道をつけたのである。

一九六〇年代における西ドイツの批判的マルクス主義者たちは、ときにルカーチやコルシユを賞揚することがあつたとしても、上述の事実について言及することはほとんどなかつた。

こうしたレーニンの切り捨てはユルゲン・ハーバーマスやその弟子たちのみならず、彼らより遙かに左派的だと当時考えられた人物、例えばオスカー・ネットのような人物にも当てはまることであつた。非常に例外的なものとしては、イリング・フェッチャーが一九六〇年に出版したマルクス主義とヘーゲルに関する著作があり、そのなかで弁証法に関するレーニンの著作が非常に真剣な考察を受けている。フェッチャーの著作のこの側面が影響力をもつことは、しかしながら、ほとんどなかつた。その本の出版によつて、ルーディ・ドゥッケや他の西ドイツのニュー・レフトの指導者たちの敵意にみちたレーニンの拒絶が和らぐことはなかつたのである。ベルリンに本拠を置き、より「正統派的な」マルクス主義で知られる雑誌 *Das Argument* ですら、レーニンではなく、ローザ・ルクセンブルクについて議論をする傾向があつた。

第二に、フロムの評論に加えて、レーニンが西欧的あるいは批判的なマルクス主義にたいして重大な影響を与えた点についてかなり明白な証拠が存在する。一例を挙げれば、コルシユはレーニンを後になつてから激しく拒絶したが、それでも、一九三三年、つまり「歴史と階級意識」出版と同年であるが、この年に初版が出た彼の「マルクス主義と哲学」は、そのエピグラフとして、レーニンの次のような一九二二年の言葉を掲げていた。すなわち「われわれはヘーゲルの弁証法……の唯物論的見地からする系統的研究を組織しなければならない」と。しかしモーリス・メルロ

「ポントニー」ほどの明敏な哲学者であつても、彼が「レーニン主義的正統派」と対照させる西歐マルクス主義の創設の書として、<sup>12)</sup>コルシユの本を考えていた。

他方、ルカーチや、コルシユ、マルクゼ、そしてアドルノと同時代人の一人である、マルクス主義哲学者エルンスト・ブロッホは、二〇世紀におけるヘーゲルの復活を直接にレーニンへと結びつけた。彼が言及するところによれば、ヘーゲルを必然的に復活させたであろうような内在的なものはドイツの伝統には何一つ存在しなかつた。というのも、彼によれば、「一八五〇年以降のドイツほどヘーゲルが隅へ追いやられたことはなかつた」からである。<sup>13)</sup>一九世紀最後の数年と二〇世紀初頭の数年の期間、ヘーゲルは、イタリア、フランス、そして英語圏では、依然として議論されてきたが、ブロッホが示唆するように、真の復活は一九一七年後に初めて起こつたのである。

クレムリンの壁の前での衝撃、それはヘーゲル左派の衝撃に迫つて余りあるものだった。弁証法は忘れ去られた思考ではなく、生きたスキャンダルとなつたのである……。しかしながら忘れ去られたのは、もはやヘーゲルではなく、むしろ啓蒙された実証主義の上品な無知のほうだったのである……。レーニンは、とりわけヘーゲルの弁証法の「核心」へ回帰することによつて、「一切の運動と生の源泉としての矛盾」、またヘーゲル論理学そのものを通じて、真正のマルクス主義をふたたび新たにしたのであった。「ヘーゲルの『大論理学』全体をよく研究せず理解しないでは、マルクスの『資本論』と

くにその第一章を完全に理解することはできない。したがつて、マルクス主義者のうち誰一人として、半世紀もの時を経たにもかかわらず、マルクスを理解しなかつた<sup>14)</sup>」。このように、ヘーゲルの認識を前提にしたのは、レーニンによつて修復されたものとしての正統派マルクス主義に他ならなかつた。そしてそれは、ピストルから発射された弾丸のように、ヘーゲルからマルクスが引き離され、したがつてマルクスからマルクス主義が引き離されてしまふような、俗流で、図式的な、伝統なきマルクス主義に対置されたのである。<sup>15)</sup>

確かにルカーチが、「歴史と階級意識」の第一章「正統的マルクス主義とは何か」を書いたのも同様の気分のうちにおいてであつた。

正統的マルクス主義とは、マルクスの研究成果を無批判的に受け入れることを意味するものでもなければ、マルクスのあれこれの命題を「信仰」したり、ある「神聖な」書物を解釈したりすることを意味するものでもない。むしろ、マルクス主義の問題における正当性とは、もつぱらその方法に関わることなのである。正統的マルクス主義とは、すなわち、弁証法的マルクス主義のなかに正しい研究方法が見いだされたということ、またこのような方法はそれを基礎づけた人物のいう意味においてのみ完成され、展開され、深化されうるものだということ、を、学問的に確信することである。<sup>16)</sup>

レーニンと一九二〇年代のヘーゲルのマルクス主義とのこうした連関は、批判理論の学者たちによって通常見落とされてきた。

ここで私は次の二つに焦点を絞りたいと思う。すなわち第一に、一九一四年に、第一次世界大戦の衝撃と社会主義の裏切りのもとで、レーニンに生じた知的な危機は、彼の初期の諸カテゴリーの再考を迫った。レーニンが一九一四―一五年のノートおよびそれ以後において、ヘーゲルを取り戻したことが、マルクス主義における弁証法的な見方に重要な貢献をなしたということ。第二に私は、レーニンのヘーゲルと弁証法についての新しい見方が後年のマルクス主義思想家たちがいかに強い影響を与えたのかという点に関する検証を加えようと思う。これらの点が、レーニンの生涯と思想に関する研究においてしばしば等閑視されてはいるが、彼の生きた時代に即してレーニンを理解するうえで重要だ——これが私の確信である。また私は、これらの問題が彼の思想の諸側面のうちで現代ともっとも密接な関係を有するものに数えられるであろうとも強く思っている。

## II レーニン、ヘーゲル、そして弁証法

中央ヨーロッパのマルクス主義における有力な思想家の多くは、一八九〇年代までには、新カント主義あるいは実証主義という姿を採る方向へ流れていた。エンゲルスも含む主要人物のうちヘーゲルに強い関心を抱いているように見える人物はいなかった。それゆえ、ヘーゲル没後六〇年が一八八一年に巡ってきたとき、当時世界的に有力なマルクス主義的思想雑誌であった「ノイエ・ツァイト」誌上に、近代的弁証法の創設者を記念する論文

を書いたのは、一人のロシア人、すなわちゲオルギー・プレハーノフ（だけ）だった。残念なことに、この論文でプレハーノフは、かなりいいかがわしい用語である「弁証法的唯物論」を造り出し、そこで弁証法についての進化的で粗雑な唯物論的解釈を展開したのである。彼はマルクス主義的な弁証法とダーウイン的な進化論とのあいだに何ら根本的な差異を見いださなかった。マルクスが、「資本論」第一巻で、「歴史的過程を排除する抽象的自然科学的唯物論の欠陥」の実例としてダーウイン的進化論に言及しているにしてもかわらず、である。

レーニンは、一九一四年までは、プレハーノフに、政治的にではないが——というのも、大方の場合、プレハーノフはロシア社会民主主義の右派に位置していたからだが——哲学的には、従っていた。このことはレーニンの機械論的著作である「唯物論と経験批判論」（一九〇八年）に明らかである。この著作は、弁証法的見地からすれば、二つの根本的限界を有していた。第一にそれは粗雑な反映論を提示しており、そこではマルクス主義的唯物論は「客観的実在性のコピー、あるいは近似的なコピー」とされていた。第二にレーニンは、観念論のすべての形態を「かざりたてられた怪談にすぎない」として放逐した。

一九一四年の知的危機の期間、レーニンは本格的なヘーゲル研究を始めたが、そこに観られる実在性のコピーとしての理論と観念論の完全な拒絶というレーニンの思想の二つの構成要素を辿ることにしよう。これら二つの点における変化は、一九一四年以降におけるレーニンの独創性を示すことになるだろう。よく知られているように、当該期のレーニンは、政治的な領域においては、

第二インターナショナルのマルクス主義との関係を絶っていた。彼は、新しいインターナショナルの設立を要求し、帝国主義戦争の内戦への転化を訴え、ついには革命的敗北主義さえ唱道していた。主要な人びとにあつてもルクセンブルクやリープクネヒト、そしてトロツキーといった少数の人びとが、レーニンとともに、最終的には数千万の戦死者という結果に終わることになる戦争にたいして、確固とした反対の姿勢を取っていた。たとえばルクセンブルクは、戦争にたいしてみずからの原則にもとづいて反対したために、投獄されたのである。

一九一四年の秋、スイスに避難していたレーニンは、そこで初めて、たんにロシア・マルクス主義の一人の指導者としてのみならず、古く信用を失った第二インターナショナルの廢墟の上に國際的マルクス主義を再建するという事業における決定的な人物として、みずからを考え始めていた。それゆえレーニンが哲学についての再考を開始したのは、政治的な領域において彼の頭をしめる出来事がほとんど存在しなかつた穏やかな期間においてではなく、むしろ彼の根本諸原理の再組織化が求められた動乱の期間においてである。なぜなら、かつてはレーニンも、いまや社会主義と労働者階級を裏切り、彼らを墮壞での大虐殺へと追いやることに加担した第二インターナショナルの指導者といった連中に、従つていたからである。

レーニンは戦争の最初の数ヶ月の間、つまり一九一四年九月から一九一五年一月にかけて、ヘーゲルに関するもつとも集中的な研究を行った。彼がヘーゲルの浩瀚な「大論理学」を要約し、その梗概を作つて注釈を加えるといった作業を開始したとき、その

哲学観に大きな変化が生じた。レーニンは、ドイツ語で全体のくだりを書き写し、ほとんどロシア語で書かれた彼自身の註釈をとるどころに置くというやり方で、この著作を集中的に研究した。

第一に、粗雑な唯物論から離脱し、ヘーゲルの観念論的弁証法を批判的に換骨奪胎するという方向への動きがあつた。エンゲルスと同様、レーニンはヘーゲル哲学の思想がもつ流動性と柔軟性に親近感を覚えていた。彼は「ヘーゲルは普通には死んだものと思われている諸概念を分析して、それらのうちに運動が有ることを示している」と記している<sup>2)</sup>。しかしすぐに彼は別の方向へと動きたし、エンゲルスのな「哲学における二大陣営、すなわち観念論と唯物論」という二分法を越えてゆくことになる<sup>3)</sup>。

観念的なものが実在的なものに転化するという思想は、深い歴史にとつて非常に重要である。しかし、人間の個人生活においても、そこに多くの真理のあることは明らかである。俗流唯物論に反して。よく注意せよ *Nota bene*。観念的なものと物質的なものの区別もやはり無条件的でも、度はずれでもない<sup>4)</sup>。

ここで初めて彼は、「俗流唯物論」という新しいカテゴリーを導入した。さらにまたレーニンは、彼の見解によれば、プレハーノフはヘーゲルのもつとも根本的な著作であるところの「大論理学」を決して分析しなかつたとノートし、プレハーノフに弁証法的ではなく「俗流唯物論者」であるというレッテルをにべもなく

張り付けた。より一般的なレヴェルの話としては、レーニンにおけるそうした見解は、通常正統派レーニン主義と考えられているものよりも、むしろ、普通は批判的マルクス主義と呼ばれているものに遙かに近いということを銘記しておくべきだろう。

さらにこのことは、ルイ・アルチュセールといったスピノザをマルクス・レーニン主義的視点から研究する人びとにとっても、スピノザの決定論的体系に対するヘーゲルの批判にレーニンが同意しているように見える、という問題を提示することになるだろう。ヘーゲルが書くように、スピノザの哲学は自由で意識的な主体を欠き、またレーニンが言うように、その代わりに思惟をたんなる「実体の一屬性」にしてしまっている。レーニンは、「大論理学」への註釈を通して、粗野な唯物論的見地がもつ一面性を避けようとしているように見える。すなわち彼は、「諸概念(諸概念)の客観性を否定すること……は馬鹿げている」と書いている。この部分は、いかなる方法によつて新カント主義批判がなされるべきかという問題を惹き起こした。レーニンは、ブレハーフのよくな自分以外の人物の著作ばかりでなく、「唯物論と経験批判論」といった自分自身の初期の著作をも批判するかのようになり、「マルクス主義者たちは、(二〇世紀の初めに)カント主義者たちやヒューム主義者たちを、ヘーゲル流にというよりもむしろフォイエールバツハ流に(およびビヒナー流に)、批判した」と書いている。ここではじつに注目すべきことが起きている。若きマルクス以来初めて、マルクス主義の伝統において主要な人物が次のような主張をしたのである。つまり、問題はヘーゲル的方法で接近されるのであり、その際、唯物論者であると公認された者の名を直接に言

挙げずする必要などないのだ、ということである。実際レーニンは、彼の見解によれば、唯物論的な、しかし非・ヘーゲル的な、それゆえ非弁証法的な、新カント主義批判を展開していた俗流唯物論から離れ、反対の方向に針路を採っていたのであった。

このことが、われわれがすでに以前の節で引いたレーニンのよく知られた箴言に、直接通じていった——「警句・ヘーゲルの『大論理学』全体をよく研究せず理解しないでは、マルクスの『資本論』、とくにその第一章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうち誰一人、半世紀も経つにもかかわらず、マルクスを理解しなかつた!」<sup>20</sup>と。

他所でレーニンは、ヘーゲルの弁証法を「自己運動と生命力の内的な拍動」と呼んでいた。次第に彼は、自分の初期の観念論を拒絶するようになっていった。いまや鍵はヘーゲルの弁証法的観念論を批判的に換骨奪胎することであり、それをマルクス主義的唯物論に結合させることであつた。レーニンは、観念論と唯物論の二つの陣営というエンゲルスの考えとは反対に、観念論と唯物論には何らかの形で弁証法的結合が存在すると思わせるような立場へ接近していった。「当時の」レーニンは知らないことだつたが、似たようなことは一八四四年に若きマルクスによつても支持されてきた。つまりマルクスは「貫徹された自然主義あるいは貫徹されたヒューマニズム」について「観念論とも唯物論とも異なりながら同時に両者を統一する両者の真理」と書いていたのである。<sup>21</sup>

第二に私は、粗雑な反映論に対してますます大きくなっていくレーニンの拒絶を、すなわち一九〇八年の彼自身の見解との断絶に関するもう一つの点を、見てみたいと思う。この動きに関する

もつとも判明な証拠は、レーニンの「ヘーゲル・ノート」の終わり近くに存在する一節「人間の意識は客観的世界を反映するだけではなく、それを創造しもある」である。これは、ヘーゲルの観念論の、能動的、批判的、そして革命的な換骨奪胎の一例である。ここでは、革命的理論のうちに具体化された認識はたんなる物質的諸条件の反映にすぎないのではなく、それはまた新しい世界へ、つまり資本主義の非人間化された社会的諸関係から自由な世界の創造へ向け、物質的な諸条件を超えて、手を伸ばすことでもあった。唯物論の側も反映論の側も、ここでは「最終的に」は優先権を得ることはない。いずれにしても、文章の流れは反対の方向へと進み、われわれを反映論の限界から、理念また概念が客観的世界を「創造する」という思想へと運んでいくのである。

レシエク・コワコフスキのようなレーニン批判者でさえも、ヘーゲルに関するこれらのノートが流動性と静的な形態との対立に集中することによって弁証法を切り縮めてしまう正統派のエンゲルスのな立場を超えているということをし、しばしば認めないわけにはゆかなかつた。その「マルクス主義の主要潮流」でコワコフスキは、次のように書いてある。すなわち「ヘーゲル・ノート」は「エンゲルスの解釈ほど単純化されていないヘーゲル主義の解釈を提示している。弁証法はたんなる『万物は流転する』という主張ではなく、人間の認識を主体と客体の絶え間ない相互作用として、つまりそこでは一方の（絶対的な優位性）がその鋭さを失うような相互作用として、解釈しようとする試み」である、と。

### III 弁証法をめぐる後年の論争に対するレーニンの衝撃

——ルフェーヴルからドゥナエフスカヤまで

フランクフルト学派の哲学者たちに対し、ドイツの外では二〇世紀マルクス主義の二つのグループがヘーゲルに関するレーニンの著作を弁証法の總体的な理解の中心に据えるという仕方では換骨奪胎した。その第一はフランスのアンリ・ルフェーヴルであり、第二のそれはアメリカのC・L・R・ジェームズと、とくにラーヤ・ドゥナエフスカヤである。両者はそれぞれヘーゲル主義的マルクス主義の新しい形態を展開したが、議論の一部はレーニンおよびヘーゲルをめぐる議論を通じてなされたのである。

一九三八年には、ノルベルト・グターマンとともにルフェーヴルがレーニンの「ヘーゲル・ノート」の独自で学術的な解釈をフランスで出版したが、フランスの外でそれに気づいた者はほとんどいなかつた（彼らは、その五年前に、マルクスの一八四四年の試論「ヘーゲル弁証法の批判」の翻訳も出版していた）。今日依然としてフランスでもつとも名高い出版社であるガリマール社によって刊行されたそのレーニンの著作「ヘーゲル弁証法に関するノート」は、フランスの知識人界において、レーニンのヘーゲルに関する著作が有名になるのを独特の仕方で助けた。フランス以外の国々、とりわけドイツや英語圏では、ヘーゲルについて書かれたレーニンの著作を巡る議論は、レーニンの熱心な信奉者か、あるいはたいはい反・レーニニックであるようなアカデミックな専門家たちといった狭い範囲に限られる傾向が、しばしばであった。ルフェーヴルとグターマンによる内容豊富な一三〇頁の序論では、「唯物論と

「經驗批判論」はレーニンの思想が一九〇八年から一九一四年にかけて果たした進歩というものを遠まわしに言い表すために言及されているだけであつた。彼らの序論は、ヘーゲルの体系ではなくヘーゲルの方法論を使うことを欲する人びとを攻撃すること、新天地を切り拓いた<sup>3)</sup>。彼らは、ヘーゲルの方法論を使うのではなく、「ヘーゲルの中身」は換骨奪胎される必要があるということ、主張したのである。しかしながら、共産党正統派への服従のために、彼らはこれがエンゲルスの立場であつたということ述べることができなかった。

その後のレーニンとヘーゲルに関するルフェーヴルの著作はいっそう用意周到であつた。これは、彼の主要な研究である「レーニン」(一九五七年)と並んで、「形式論理学と弁証法論理学」(一九四七年)についてもまた、当てはまることであつた。実際、初めからずつと問われてきたこところのものについてルフェーヴルがついに公に発言するようになったのは、彼がフランス共産党を追放されてからのことだつた。ルフェーヴルは、一九五九年に出た自伝「総和と余剰」において、レーニンに関し次のように書いている。

彼は、一九一四―一五年において初めて、ヘーゲルを真剣に読んだり研究したりしたのである。したがって、客観的に観察し思考するならば、「弁証法に関するノート」と「唯物論と經驗批判論」とのあいだには、調子と内容の大きな相違が認められる。レーニンの思考ははるかに柔軟で生き生きとなり……要するに、弁証法的になるのだ。<sup>3)</sup>

脚注でルフェーヴルは「ここに、『唯物論と經驗批判論』に有利なように永いあいだ傍らに退けられていたこれらの『ノート』に対する(ヘスターリン主義者)たちの深い黙説法の意味がある」とも付け加えている。

問題の核心に関してルフェーヴルはようやくこのように認めたのだが、それはレーニンに関する主要著作や試論のいずれにおいてもなく、長大な自伝の中の何気ない一節において公表された。そのために、一九六〇年代、七〇年代において、ルイ・アルチュセールとその学派が反・弁証法的、反・ヘーゲル的、原・毛沢東主義的な解釈を行なう<sup>3)</sup>——それはとくにアルチュセールの「レーニンと哲学」に見うけられるが——余地が残されてしまった。一九六八年に公開講演として出された、こうした表題をもつ試論は、「唯物論と經驗批判論」とレーニンの経済学的著作に集中しており、「ヘーゲル・ノート」に言及することはまったくなかつた。ジャン・イッポリットがこのノートについて公に注意を促してから、ようやくアルチュセールはとくにこのノートに関する論文を書いたのである。レーニンとヘーゲルに関する説明のあちこちでアルチュセールは、しばしばお茶を濁しながらも、実際には反対のことを述べている文章をつなぎ合わせることで、ヘーゲル批判をレーニンのものと見なした。マルクス「資本論」を完全に把握するためにはヘーゲルの「大論理学」を研究する必要があるという、先にも引いたレーニンのよく知られた一文への応答として、アルチュセールはレーニンの言葉に事実上の「脱構築」を施し、その最後に、おおよそ独断的に読者に次のように言つた。すなわち「資本論」を完全に研究し、そして理解したのでなければ、ヘー

ゲルを理解することは不可能である」と。<sup>33</sup> アルチュセールは、レーニン思想からヘーゲルを省こうと試みることで、マルクス主義からヘーゲルを消去するという、その全計画にあつて重大な部分を実行していたのである。レーニンによるヘーゲルへの回帰といふいかなる考えも、マルクスは一八四六年までにはみずからのヘーゲル主義を清算していたと宣言するアルチュセール主義にとつては、重大な脅威を構成していたといふことは明らかである。なぜなら、もしレーニンが一九一四年に本當にヘーゲルへ回帰していたとすれば、アルチュセールが一九六二年に提案したような「ヘーゲルの影を夜の闇の中へ……追いやること」は、マルクス主義者たちにとつて、遙かに難しいものとなるからである。

ジェイムズとドゥナエフスカヤは、一九四〇年代にアメリカで、レーニンおよびヘーゲルについて書き始めた。一九四八年、ジェイムズは、後年になって出版することになる、レーニンとヘーゲルについての格式張っていない省察をいくつか書いた。ドゥナエフスカヤはレーニンの「ヘーゲル・ノート」の全体を一九四九年までには翻訳していたが、出版社を見つけることができないでいた。これはおそらく、ヘーゲルに対する実証主義者の反対のためであり、このような反対は当時のアメリカにおいては至極ありふれたものであつたし、シドニー・フックのような著名な左翼の哲学者たちの間ですらそうだったのである。ルフューヴルとは異なり、ジェイムズとドゥナエフスカヤは、トロツキー主義的な運動の組織員であつた。彼らは、レーニンの「ヘーゲル・ノート」を自分たちの哲学的基礎の重要な部分として用いることで、正統派トロツキー主義からいくぶん距離を置くような立場を採つてい

た。第一に彼らは、スターリンのロシアを描くために、国家資本主義の理論を展開した。第二に彼らは、前衛党というレーニンの概念をエリート主義的であり、反・弁証法的でもあるとして、批判した。第三に彼らは、一九〇八年のレーニンの哲学的態度と一九一四年以後のそれとを分離し、ヘーゲル、マルクス、レーニンに基礎を置く弁証法の体系的の研究を進めることを要求した。第四に彼らは、アフリカ系アメリカ人は、アメリカ資本主義に対して、独立し潜在的には革命的な反対勢力である、という考えを提示した。

一九五〇年代、六〇年代、ドゥナエフスカヤとジェイムズが別々の方向に進むことになつた後、彼女は上述のいくぶん未定形の諸概念を彼女がマルクス主義的ヒューマニズムと呼ぶもの要素として展開した。後にも先にも彼女のように深く、あるいは創造的に、レーニンの「ヘーゲル・ノート」を探求したマルクス主義者はいなかつたのであり、彼女は現代の革命的弁証法の根拠として、それを批判的に換骨奪胎したのである。その著作「マルクス主義と自由」（一九五八年）の付録で彼女は、レーニンの「ヘーゲル・ノート」とともにマルクスの一八四四年の「経済学・哲学草稿」の主要部分の初の英訳を出版した。「哲学と革命」（一九七三年）で彼女は、「なぜ今ヘーゲルか？」と題された議論の一部として、マルクスのヘーゲル回帰とともに、レーニンのヘーゲル回帰をも取り上げた。

きつとレーニンは、「資本論」のすべての研究者はまず初めに苦心して「大論理学」二巻本を読み通さねばならない、と

いう意味で言ったのではない。決定的に重要なことは、まさに「認識は、世界をたんに反映するのではなく、それを創造する」という彼の註釈においてはつきり表現されているように、レーニンが旧い概念と手を切ったということだった。……レーニンは、唯物論と観念論の統一に関するまったく新しい理解をヘーゲルから得ていた。一九一五年以降のレーニンの著作に浸透しているのは、この新しい理解なのである。

同時にドゥナエフスカヤは、レーニンによるヘーゲルの換骨奪胎に関して、説得力のあるいくつかの批判を展開した。第一に彼女は、ヘーゲルと弁証法について、レーニンは自分の新しい考えをもっと率直に語るということをしなかったために、残された遺産は不明瞭なものとなってしまったと論じた。

レーニンが「哲学的科学として弁証法それ自体に」強調を置いていることは、レーニンを他の一切のマルクス以後の、つまりロシア革命に至るまでの時期だけでなく権力の獲得後にもまで及ぶ、マルクス主義者から分離させた。……一九一四―一五年のヘーゲル研究から彼が得たものでもっとも明白なもの、ヘーゲル弁証法は「即自かつ対自的に」学ばれる必要があるということであった。しかしレーニンがヘーゲル弁証法との直接の遭遇を――ヘーゲル「大論理学」の要約――明かさずにおいたことは、ドイツ社会民主主義だけでなく、第二インターナショナルの全体が陥っていた、経済主義の泥沼の深さを示している。革命家たちは同じ立場に立っていたの

である！<sup>39</sup>

ドゥナエフスカヤにとつてこうしたすべてのことは、レーニンがその「唯物論と経験批判論」のロシアでの再版を一九二〇年に許可したという事実によつて、いつそう混み入ったものとなった。次のことを覚えておいて欲しいのだが、彼は「帝国主義論」や「国家と革命」を他の言語に翻訳させたが、「唯物論と経験批判論」については、そうはさせなかつたということ、このことは留意されるべきなのである。しかし、一九二七年には、ますますスターリン的となった組織が「唯物論と経験批判論」を広範に外国語訳することになる。そして万国の諸共産党は、知識人たちに釈明を求めするために、――その中にはルフェーヴルも含まれているのだが――その本の粗野な観念論攻撃を巧みに利用することになるのである。

弁証法に関するレーニンへの第二の批判でドゥナエフスカヤは、決定的な契機においてレーニンが、弁証法の実践的で活動的な側面を誇張し、またそこで理論的側面を極小化した、と論じた。このことは、「大論理学」の終わり近くの善の理念についての章における彼の議論に、とくに看取れる。

第三にドゥナエフスカヤは、レーニンが、いくつかの点において、とりわけ「大論理学」の最後の頁の絶対的理念についての議論において、ヘーゲルをあまりに狭義に唯物論的な仕方で解釈している、と論じた。レーニンが、部分的に、エンゲルスの「フォイエルバッハ論」（二八八六年）における見解、つまりヘーゲルの絶対的理念は歴史の目的についての非弁証法的で抽象的かつ観

念論的な考えを具体化したものであるという意見と袂を分かつていたのも真実である。エンゲルスにとって絶対的理念とはヘーゲルの「体系」というものとりわけ顕著な例なのであって、そのようなものはヘーゲルの弁証法的な「方法」が選ばれる代わり拒絶されねばならない当のものであった。エンゲルスは、ヘーゲルに対する若き日の熱狂からかなり経って書かれた「フォイエールパッサ論」で、上述の結論に対して、原文にもとづくいかなる証拠も提示していないが、これはおそらくそのようなものをほとんど見つけることができなかつたためであろう。レーニンは「大論理学」の最後の章に関する注意深い研究をしている間に考えを変え、絶対的理念の章は観念論というよりもむしろ唯物論を含んでいるのであり、それゆえマルクス主義によつて換骨奪胎せられると論じた。それにもかかわらず、ドゥナエフスカヤの論じるところによれば、レーニンはエンゲルスよりも深いところまで進む一方で、二つの決定的な間違いを犯した。レーニンは矛盾概念に焦点を合わせていたのだが、否定性というヘーゲルの核心的な概念については、ごく僅かにしか力点を置かなかつた。ここで彼は、

一九一四―一五年には第二インターナショナルの記録保管所で忘れられたまま眠っていた「一八四四年のエッセイ」における、否定性の弁証法を巡るマルクスの決定的な議論に馴染みがなかつたことに対して、代償を支払つたのである。確かにレーニンは、ヘーゲルが「大論理学」最終章の終わりの段落で論理から自然への移行について書いていることを捉えてはいた。ここでレーニンは、ドゥナエフスカヤが指摘したように、レーニンはヘーゲルにおい

てこの後に即座に続くところのものを無視した。というのも、ヘーゲルはこれとは別の移行を、すなわち論理から精神あるいは心 *Geist* への移行を、展開したからである。

最後に第四にドゥナエフスカヤは、レーニンが前衛党というエリート主義的概念を弁証法的に再解釈することに失敗したことについて論じた。この前衛党の概念は、革命期の、下からの自然発生的な創造性の衝撃のもとで、大幅な修正を受けたものの、それにもかかわらず本質的には「何をなすべきか」(一九〇二年)以来変わらぬままであつたのである。彼女はその代わりとして、組織の新しい概念を、つまり彼女が組織と哲学の弁証法と名づけるものに根ざした組織の概念を展開する必要がある、指摘したのである。それが基礎づけらねばならないところは、たんにヘーゲルのうちにだけではなく、一八四〇年代の共産主義者同盟から一八六〇年代の第一インターナショナル、そして「ゴータ綱領批判」(一八七五年)に至る、マルクスの組織問題に関する著作のうちに、そしてそれらと並んで、マルクスの広範にわたる、しかし無視された仕事のうちにおいてなのである。

#### IV 結論

一九一四年から一五年における、レーニンとヘーゲルとの出会いの全局面は、そこから派生する諸問題と同様に、マルクス主義の遺産の重要な部分である。これらを飛ばして読むことは、この伝統の豊かさのうちの或る部分を無視することである。ロシア革命がスターリンとその後継者たちの支配下において、反対のものへと、すなわち全体主義的な国家資本主義社会へと形を変えた

いう事実は、ますます二〇世紀マルクス主義史の矛盾に満ちた本質を直視しなければならぬ理由になっている。だからこそ、レーニンとその同世代と無関係にマルクスに回帰しようとする努力は、看過し得ない限界を持っている。このことはマルクスを今日に取り戻そうとする最近の試みのなかでもっとも有名なもの、すなわちジャック・デリダの「マルクスの亡霊たち」(一九九三年)にすら当てはまることなのである。

私は、弁証法に関するレーニンの二つの主要な達成について、概略を述べた。第一に彼は、修正主義的マルクス主義に対立するもの、革命的なマルクス主義のための根拠として、本来の弁証法という論点をうち開いたのであり、またその意味でルカーチのよくな後の著述家たちに道を用意したのである。第二に、ヘーゲルおよび弁証法に関する彼の著作は、ヘーゲルのマルクス主義思想の内部におけるかなりの数の創造的な諸流派に、それもとくにフランスとアメリカにおいて直接的な影響を与えた。これらの点はレーニンによる弁証法の再発見の重要性を示すのみならず、革命的思想と革命的活動内部における弁証法の持続をも示している。われわれは遺産を無視することで危険を冒している。しかし、一九一四年にレーニンが直面した事態よりもより深い危機へとわれわれを落とし込んでしまった前世紀における間違ったあの転回を繰り返すべきではないとすれば、依然としてわれわれはレーニンの遺産をきわめて批判的なやり方で換骨奪胎することが必要なのである。

註

- 1 Heinz Osterle, 'Albert Reiss', キリツ Shannon Linehan の有益なコメントに感謝した。
- 2 この点に関しては Raya Dmyarskaya, *Marxism and Freedom: From 1776 until today*, New York: Bookman, 1938) (「レーニンのエッセンス」) 疎外と革命——マルクス主義の再建」三浦・対馬訳、現代思潮社、一九六四年) を参照。
- 3 Samuel Farber, *Before Stalinism: The Rise and Fall of Soviet Democracy*, New York: Verso, 1990 参照。
- 4 レーニンの「唯物論と経験批判論」に対する真剣な批判として Maurice Merleau-Ponty, *Adventures of the Dialectic*, trans. by Joseph Bien, Evanston, IL: Northwestern University Press, 1973, orig. French edition 1955 (『弁証法の冒険』滝浦・木田・田島・市川訳、みすず書房、一九七二年) を参照せよ。
- 5 フロムはこれらの論評を *Trotsky's Diary in Exile*, Cambridge: Harvard University Press, 1958 (『トロツキーの日記——査証なき旅』栗田・浜田訳、現代思潮社、一九六八年) の出版されなかった書評においておこなった。本文で引用されたフロムの論評は、レーニンのみならずトロツキー、マルクス、エンゲルスにも関わるものであった。全文は、Kevin B. Anderson, 'A Recently Discovered Article by Erich Fromm on Trotsky and the Russian Revolution', *Science & Society* 66:2 (Summer 2002), pp. 266-273 を参照。
- 6 Herbert Marcuse, *Reason and Revolution*, New York: Oxford, 1941 (『理性と革命——ヘーゲルと社会理論の興隆』耕田ほか訳、岩波書店、一九六一年) を参照。マルクーゼは非常に簡潔に、弁証法に関するレーニンの議論の一つを参照しているが (Ibid., pp. 314, 401 (前掲訳書 三五〇、四四九頁))、その一方で彼は「ヘーゲル・ノート」にはまったく言及しなかった。後年、*Soviet Marxism*, New York: Columbia University Press, 1958 (『ソビエト・マルクス主義——抑圧的工業社会のイデオロギー批判』片岡訳、サイマル出版会、一九六九年) でマルクーゼは、レーニンからスターリンへの移行を、量か

ら實入の転回の、弁証法の実例として提示している一方で、弁証法に関する章では、レーニンとハーゲルについてはまったく触れることがなかった。

- 7 Oskar Negt, ed., *Kontroversen über dialektischen und mechanistischen Materialismus*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag, 1969 年集。

- 8 Inig Feischer, "The Relationship of Marxism to Hegel" (orig. 1960) in his *Marx and Marxism*, trans. By John Hargreaves, New York: Herder and Herder, 1971 (『歴史的自覚の論理』平井沢人文書院、一九七一年)を参照。本章における前掲の問題は、他の多くの問題に際して、より詳細な議論のためには、『*Lenin, Hegel and Western Marxism: A Critical Study*, Urbana: University of Illinois Press, 1995 年集]を参照。

- 9 Rudi Dutschke, *Versuch, Lenin auf die Füsse zu stellen*, Berlin: Verlag Klaus Wagenbach, 1974 年、247, Bernd Rabehl, *Marx und Lenin*, Frankfurt: Verlag fuer das Studium der Arbeiterbewegung, 1973 年集]を参照。

- 10 Karl Korsch, *Marxism and Philosophy*, trans. by Fred Haliday, London: New Left Books, 1970, p. 29 (『トルクム主義』訳者]平井・岡崎訳、未来社、一九七七年、六七頁)

- 11 『レーニン全集』第三三巻、一九五九年、大月書店、一三三頁。

- 12 Merleau-Ponty, *Adventures of the Dialectic*, p. 64 (前掲書、八七頁)

- 13 フリードリッヒ・ニーチェが、一八七四年の「教育者としてのショーペンハウアー」(『反時代的考察』小倉志祥訳、『ニーチェ全集』第四巻、理想社、一九八〇年)で書いたように、より以前には「畑に植わっているハーゲル麦の豊年があった。しかし今や作物は霧に包まれてために、すべてが干草積みは空っぽである」(Donald N. Levine, *Visions of the Sociological Tradition*, Chicago: University of Chicago Press, 1995, p.193)。

- 14 『レーニン全集』第三八巻、一九六一年、一五〇頁。各所

で私は、その『レーニン全集』第三八巻に収録されている、レーニンの「ハーゲル・ノート」の標準的な英訳版を参照しているが、たいていの場合、実際には、ハーゲル主義的マルクス主義者であるドゥナエフスカヤの手により、前掲の「殊外と革命——マルクス主義の再建」第一版の付録として一九五八年に出版された、より精確な翻訳のほうを使用している。

- 15 Ernst Bloch, *Subjekt-Objekt: Erläuterungen zu Hegel*, Frankfurt: Suhrkamp Verlag 1962, pp. 382-83.

- 16 Georg Lukács, *History and Class Consciousness: Studies in Marxist Dialectics*, trans. by Rodney Livingston, Cambridge: MIT Press, 1971, p.1 (『歴史と階級意識』筑波・古田訳、白水社、一九九一年、二二頁)

- 17 この二〇年来、英語で出版されたレーニンに関する多くの研究は、他の方面において多くの貢献をしたのだが、それにもかかわらず、一九一四—一五年の「ハーゲル・ノート」が、この問題を無視ないしは縮小化するような傾向があった。トニー・クリン(四巻本 (Tony Cliff, Lenin, London: Pluto Press, 1974-79) は、「ハーゲル・ノート」についてはたった一文を掲げているだけである。ニール・ハーティマンの二巻本 (Neil Harding, *Lenin's Political Thought*, New York: St. Martin's, 1978, 1981) はこのノートに若干の言及している。ロバート・サーカンス(三巻本 (Robert Service, *Lenin: A Political Life*, Bloomington, IN: Indiana University Press, 1985, 1991, 1996) はこのノートを取り上げているが、それは数頁にすぎず、また焦点はこのノートが過大評価されてきたところにあるに置かれている。ハーティマンの前掲書より後に出版された著作 *Leninism*, Durham, NC: Duke University Press, 1996) は、レーニンの哲学の一章が掲げられているが、「ハーゲル・ノート」さえも教条的であると斥けられている。サーカンスのこの最近の著作 *Lenin: A Biography*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 2000 (『レーニン』河合訳、筑波書店、二〇〇二年) は、レーニンおよびハーゲルに関する問

- 題から一歩後退している。なぜなら、この著作で彼は、「ヘーゲル・ノート」よりも、むしろ同じ時期に書かれた、アリステレスに関するレーニンの非常に短いノートにより大きな注意を払っているからである。以上のように、レーニンとヘーゲルという問題はほとんど完全に回避されているが、フランスでは事情は別である。フランスでは一九三〇年代のルフェーブルの議論以来この方（私はこの問題をこの章の後で取り上げる）、レーニンがヘーゲルに負っているものがある。これという問題を無視することは不可能だったのである。これに関して、例えば Marcel Liebman, *Leninism under Lenin*, trans. By Brian Pearce, London: Jonathan Cape, 1975, orig. French edition 1973, またこれと並んで、以下のより哲学的な考察 (Michael Löwy, *Dialectique et révolution*, Paris: Editions Anthropos, 1973) を参照せよ。ルイ・アルチュセールの著作に因って以後は皆々。
- 18 Karl Marx, *Capital*, Vol. I, trans. by Ben Fowkes, London: New Left Books, 1976, p. 494 (『資本論』第一巻第二分冊西崎暲訳、大月書店、一九七二年、二四八頁)
- 19 以上「唯物論と経験批判論」『レーニン全集』第一四巻、一九五六年、二二六頁。
- 20 同前『レーニン全集』第三八巻、八二頁。
- 21 よく知られていることであるが、エンゲルスはこのいさゝか戦争的な響きのするメタファー——英語で「camp」となるドイツ語の「Lager」は軍事的地帯を意味しているわけだが——を Ludwig Feuerbach and the End of Classical German Philosophy, in Marx and Engels, *Collected Works*, Vol. 26, Moscow: Progress Publishers, 1990, p. 366 (トクニエドマン、論』松村訳、岩波書店、一九六〇年、三〇頁) で使用している。
- 22 同前『レーニン全集』第三八巻、八六頁。
- 23 同前、一三八頁。
- 24 同前、一四九頁。
- 25 同前、一五〇頁。
- 26 同前、一五〇—一五一頁。
- 27 Karl Marx, "Critique of Hegelian Dialectic" (1844), in Erich Fromm, *Marx's Concept of Man*, New York: Frederick Ungar, 1961, p. 181 (『マルクスとエンゲルス全集』第四〇巻、大月書店、一九七五年、五〇〇頁)。第二インターナショナル (そしてエンゲルス) が無視した一八四四年の『経済学・哲学草稿』は、レーニンの死後になって初めて、最初の *Marx-Engels Gesamtausgabe* (MEGA) の一部として出版された。最初のメガ版 (新メガ版は現在進行中である) の刊行は、レーニンの強力な支援のもと、一九二〇年代初頭に始まった。スターリンは主要な編者であったタヴリト・リヤザノフを処刑し、その支配でこの最初のメガ版は中断された。
- 28 同前『レーニン全集』第三八巻、二二二頁。
- 29 Leszek Kolakowski, *The Golden Age*, Vol. 2 of his *Main Currents of Marxism*, New York: Oxford University Press, 1978, p. 464. ロンコフスキが「ヘーゲル・ノート」を評語した唯一の非レーニン主義の哲学者だというわけではない。例えば、ルイ・デュエンのかなり秘密な研究 Louis Dupré, *Marx's Social Critique of Culture*, New Haven: Yale University Press, 1983 を参照。
- 30 「一八四四年の経済学・哲学草稿」第三草稿「マルクスとエンゲルス全集」第四〇巻、大月書店、一九七五年、二八五頁以下。
- 31 この時期のルフェーブルの背景事情については、とりわけ、Fred Bud Burkhard, *French Marxism between the Wars*; Henri Lefebvre and the "Philosophes", Amherst, NY: Prometheus Books, 1999 を参照。
- 32 Henri Lefebvre, *La Somme et la restie* (Paris: La Nef, 1959), p. 85 (『哲学の危機・総論と余剰』白井・森本訳、現代思潮社、一九七〇年、一二二頁)
- 33 *Ibid.*, p. 85 (同前『哲学の危機・総論と余剰』六一〇頁)
- 34 アルチュセールの哲学的な部分における毛沢東主義への親和性については、Gregory Elliott, *Althusser: The Detour of Theory*, London: Verso, 1987 を見よ。

- 35 Louis Althusser, *Lenin and Philosophy, and Other Essays*, trans. By Ben Brewster (New York: Monthly Review, 1971), p. 112 (「レーニンと哲学」西川訳、人文書院、一九七〇年)。私はこの点に関しての自著においてより立ち入った考察をしている (*Lenin, Hegel, and Western Marxism*)。
- 36 Althusser, *For Marx*, trans. by Ben Brewster, New York: Vintage, 1970, p.116 (「マルタスのために」河野ほか訳、平凡社ライブラリー、一九九四年)。問題となっている試論は一九六二年にフランスで最初に出版された。
- 37 C. L. R. James, *Notes on Dialectics: Hegel-Marx-Lenin*, Westport, CT: Lawrence Hill, 1980.
- 38 Raya Dunayevskaya, *Philosophy and Revolution: From Hegel to Sartre and from Marx to Mao*, New York: Delacorte, 1973, p. 103.
- 39 Dunayevskaya, *Rosa Luxemburg, Women's Liberation, and Marx's Philosophy of Revolution*, Urbana: University of Illinois Press, 1991, orig. 1982, p.116.
- 40 訳者——『絶学草稿』の116。
- 41 前掲『レーニン全集』第三八巻、110—111頁。
- 42 Dunayevskaya, *The Power of Negativity: Selected Writings on the Dialectic in Hegel and Marx*, edited by Peter Hudis and this writer, Lanham, MD: Lexington Books, 2002.